

37. 七夕、成長へのメルクマール

医事万華鏡

7月7日は七夕。伝説では年に一度、織姫星と彦星が天の川を渡って会うことのできる特別な日と言われています。私自身も幼少期、短冊に願い事を書き笹竹に吊るすのは何だか心が弾むようで、今でも「タナバタ」という響きにロマンを感じてしまうものです。

さてその七夕伝説ですが、中国を発祥とし、中国の行事であったものが奈良時代に伝わり、日本古来の棚機津女（たなばたつめ）の伝説とミックスして生まれたそうです。ちなみに、織姫と彦星は中国ではそれぞれ織女、牽牛と呼びます。以下がその内容です。

天帝に機織りの名手で織姫という娘がいて、天帝はそれがとても自慢でした。年頃になり娘に夫を探していた天帝は、働き者で有名な牛飼いの彦星を引き合わせたところ、二人はすぐに恋に落ちて結婚することになりました。しかし、結婚してから織姫は機織りに精を出さなくなり、それを見かねた天帝が二人を引き離してしまいました。しかし昼夜を問わず泣きはらしていた織姫を不憫に思った天帝は、7月7日の夜にだけ二人の逢瀬を叶えさせてくれるとしまし

た。二人は心を入れ替え、その日に逢えることを願って真面目に働くようになりました。

そんな七夕伝説ですが、日本に伝来して以降、

奈良時代末期に成立した『万葉集』では、七夕について詠まれた詩が100首以上も存在しています。また、平安時代に入ると宮中行事として七夕行事が行われ、江戸時代には七夕行事が五節句の一つとなると、七夕は庶民の間にも広まり、全国的に行われるようになりました。人々は野菜や果物を供え、また梶の葉に代わって五色の短冊に願い事を書き笹竹に吊るす、星に祈りを捧げるお祭りへと変化していきます。ちなみに、地域によっては、祭りの後に飾りごと竹や笹を川や海に流す風習がありますが、生命力に溢れた笹や竹は、古より不思議な力を宿すと言われてきたため、竹や笹に「穢れ」を移し払ってもらうという意味が込められているそうです。

さて、伝説によると晴れて7月7日の七夕の夜、織姫と彦星は「再会」を果たすわけですが、その「再会」とはただ再び会うことを意味してはいません。それは関係を生まれ変わらせること、すなわち「再構築」であり、再び会える日まで二人は共に成長している必要があります。忍耐は人を必ず成長させるものだからです。

今年も7月7日がやってきます。久しく会っていない知己との出逢いに向け「成長」を誓ってはいかがでしょうか。

(JMS主幹・野村元久)

